



TITLE:

一つの疑問

AUTHOR(S):

---

CITATION:

一つの疑問. 天界 1942, 22(257): 364-364

ISSUE DATE:

1942-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168463>

RIGHT:

## 一 つ の 疑 問

山本一清先生

拜啓（前略）下の件につき、御高見を伺ひ上げます。某俳句雑誌に、萬葉集の柿本人麿の歌

“ひんがしの 野に かぎろひの 立つ見えて  
かへりみ すれば 月 傾きぬ”

の中に“かぎろひ”を、一俳人の研究によりて、黃道光ならんと言ひ、萬葉學者も此の説を妥當と認めたる由、記載して居ります。

拙者“言海”等にて調べたるに、“かぎろひ”の意味には、黃道光等の意は之れ無く、且つ、“月傾きぬ”とあつて、夜明けの時刻より考へ、17日頃の月のことなれば、歌人が天文研究家でもない限り、黃道光は、月光に妨げられて、到底見ること能はざるべく、たとへ見えたとしても、歌興を催すほどの美觀には非ざるべしとの理由によりて、該雑誌所載の説は當らずと存じます。（下略）

八月13日

尾道市にて 松 本 義 一

この手紙を読んで、これは面白い問題だと思つたが、念のため、野尻氏の意見を伺つたところ、それに對して、次ぎの如き返書を受けた：

山本一清様

拜啓（前略）私もこの松本氏の御意見に賛成であります。守部の解釋“かぎろひとは旭日の餘光をいへるなり”といふ屢々引用される註が、その時の大體の月齡から考へても、最もうなづけることと思ひます。なまじ黃道光などの新知識が、行き過ぎた解釋を案出させたのでありませう。かのルバイヤトの“偽りのしのめ”などは、正しく黃道光でありませうが、“かぎろひ”といふ相當印象のあざやかな語からも、黃道光とするのは無理と思ひます。（後略）

八月27日

野 尻 抱 影

“かぎろひ”といふ言葉が此の場合のみに用ゐられてゐるのならば、尙、いろいろ考究の餘地があるかも知れないが、他にも白晝の現象として此の言葉が昔から用ゐられてゐるのであるから、この疑問は餘り深く詮索する必要がないやうにも思ふ。（山本）

**高城武夫氏**（本會理事）は去る九月9日、大阪を出發、北海道へ出張、同26日歸阪された。この出張の目的は來年二月5日の皆既日蝕觀測地を調査するためであつた由。